

# 日英語の比較の観点から見たオノマトペ

## —感性の表現の魅力—

吉村 耕治

### 1. はじめに一ますます進化する日本語のオノマトペ

日本語母語話者は、万葉の時代から感性の表現の一種であるオノマトペを、身近な表現として利用してきた。現代では普通の会話だけでなく、新聞・雑誌の見出しや、広告文、商品名、マンガ・アニメ、散文・詩作品などで幅広く活用されている。オノマトペの使用を避ける作家もいるが<sup>1)</sup>、日本語は、漢字使用の文化圏の中でもオノマトペの種類が豊富で使用頻度が高いために、「オノマトペの宝庫」とも呼ばれている。日本語におけるオノマトペは、その根源の意で「日本語のへそ」(小野 2009: 11) とか、「究極の日本語」(得猪 2007: 13)、「言葉の調味料」(得猪 2007: 22) とも称されている。オノマトペが日本語の特性に合致した根源的な表現であり、日本人のコミュニケーションの場では必要性の高い言語要素であるという共通認識が見られる<sup>2)</sup>。

オノマトペは、言葉のプリミティブ(原始的)な要素で、子供にも容易に創造することができ、簡潔な表現で、臨場感にあふれ、心地よいリズムを備え、繊細で微妙な描写力を備えた表現である。そのようなオノマトペが豊かで、普通のコミュニケーションの場で多用されているという点に、日本語の文化的特徴が反映

していることを指摘したい。本稿は、日本語と英語のオノマトペを言語文化論の視点から対照的に考察し、「言葉の化石」とも言われるオノマトペには、日本語らしさが反映していること、及び、オノマトペを中心に感性の表現の魅力について指摘することを目標にしている。

日本語のオノマトペは、単に種類の豊かさに特徴があるだけではない。21世紀に入って一層の進化を遂げている。その進化は、広告文での使用のような言語学分野だけではなく、身体運動科学や料理のような多様な分野での応用(広がり)が見られる点に特徴がある。

第一の進化は、身体と密接に結びついたオノマトペの存在が指摘され、「スポーツオノマトペ」(藤野 2008: 16-17) という言葉が用いられ始めたことである。オノマトペを口に出す(発話する)ことによって、人間の体を通して精神や感情に直接的に働きかける力が生み出されると考えられている。これは、身体がスムーズに動くのを助けてくれる働きを持つオノマトペであるため、日常生活における「魔法の言葉」(藤野 2013b: 3) とか、「困った」を解決する秘密の「かけ声」(藤野 2013a: 3) と呼ばれている。スポーツオノマトペは、身体のリズムや運動と連動していることから、特にスポーツや体育を実施する時に応用されることが推奨

されている。このオノマトペは、身体運動科学の分野での実用的応用が検討され、実際に利用されつつある。これは、表現研究と身体運動科学との融合(学際的共同研究)の可能性を示唆している。

第二の進化は、甘いお菓子やデザートの方で使われるスイーツオノマトペなど、いろいろな分野に見られるオノマトペの積極的な活用例である。

## 2. オノマトペの定義—日英語の重大な相違

日本語と英語のオノマトペの重要な相違として、最初に、オノマトペの定義(意味)に見られる違いについて確認したい。オノマトペの定義には、狭義と広義の2通りの解釈がある。その定義にも、日本語と英語における相違が見られる。英語のオノマトペは、人の声や動物の鳴き声を模倣して言語音で表現した“voice onomatopoeia”(擬声語)と、自然界に存在する事物の音を模写して言語音で表現した“sound onomatopoeia”(擬音語)の二つに大別される。英語では擬態語はmimesisと呼ばれる。つまり、英語ではonomatopoeiaという表現が意味するのは、擬声語と擬音語のみである。狭義の解釈では、擬音語と擬声語のみがオノマトペと考えられている。人や動物が発する声か、それとも事物の音かを区別している。英語では“an animate thing”(動くもの、生物)と、“an inanimate thing”(動かないもの、無生物)とを区別していることになる。この区別には、行為者中心表現を好むという英語圏文化の根源的な特徴が反映している。

ところが、日本語では擬音語と擬声語

の区別が曖昧で、オノマトペには擬態語を含めるのが、一般的である。例えば、小野(2009: 7)は、オノマトペが「ゴーン」(鐘の音)や「キーン」(飛行機の音)のような擬音語と、回転を表すクルクルや輝きを表すピカピカのような擬態語とを一括して言うものと、定義づけている。丹野(2005: 1)や得猪(2007: 15)も、オノマトペは擬音語と擬態語を意味すると説明している。擬音語・擬声語だけではなく、擬態語も含めるとというのが、広義の意味のオノマトペの解釈である。日本語の持つ感性では、animateとinanimateの区別が曖昧になりやすいという点に特徴がある。この違いは大きい。

辞書においても同様の現象が見られる。山口(2003)『暮らしのことば：擬音語・擬態語辞典』では、擬音語の意味を、「現実の世界の物音や声を私たちの発音で写しとった言葉」(p. 1)と定義づけている。この擬音語の定義には、擬声語も含められている。そのために「身近な猫の声『にゃんにゃん』という擬音語」(下線筆者)と説明している。つまり、擬音語と擬声語の区別が行われていない。そして、擬態語を、「現実世界の状態を私たちの発音でいかにもそれらしく写しとった言葉」(p. 1)と定義づけている。擬態語は、例えば、「ウロウロ」「コロリ」「ツツン」「テキパキ」「ピカリ」「ニヤニヤ」のように、事物の状態や様子、身振り、心情のように音が出ていないものを、感覚的に言語音で象徴的に描写した語である。音が出ているか、出ていないか、つまり、外界の音響的事象の描写の有無が、擬音語・擬声語と、擬態語の違いである。『広辞苑』(第6版、2008年)の「擬態語」の

項目では、「視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象を言語音で表現した語。にやにや・ふらふら・ゆったりの類」(p. 684)と説明している。これは、要点を押さえた理解しやすい説明である。

山口(2002)では、「第二部：動物の声の不思議」で、平安時代末期に成立した『大鏡』には犬の吠え声が「ひよ」と書かれているが、濁音表記がなかったので、実際は「びよ」であつたろう、と指摘している。そして、「ハ行音とパ行音の擬音語・擬態語は、両形存在し、ほぼ同様な意味」(p. 200)を表していると述べている。動物の鳴き声を表すオノマトペにも、「擬音語」という表現を用いている。

桜井(2010: iii)は、「オノマトペ＝擬音語」と「ユートピア＝理想郷」とを合わせて、新造語の「オノマトピア」を造っている。「擬音語大国ニッポン」は、豊かな「オノマトペが無かったら、日本語の表現能力は五割ガタ落ちる」(p. iii)と述べ、CMコピーの「ピッカピッカの一年生」を例として挙げている。オノマトペが「ニクタイのソーカイ感」(p. iv)を伴っており、「イミよりヒビキのかもしれない霧囲気にポイント」を定め、「エスカレートしている」(p. iv)現状を指摘している。そして、オノマトペを「視聴味嗅触の五感を中心に体性感覚をも加えた全感覚器を動員」(p. vi)して、「共通感覚」の統合作用によって生み出される「カラダコトバ」(p. vi)と規定することを提唱している。この考えは、スポーツオノマトペにも見られる発想法である。

オノマトペの定義に見られる日英語の差異の要因を探すと、天沼(編)『擬音語・擬態語辞典』(1974年)に、そのヒントが

見られる。天沼(1974)は、擬声語という名称「が広く行われており、むしろ、擬声語のほうが広く用いられているかもしれない」(p. 11)と言及している。それにもかかわらず、擬音語の中に「人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、ものを飲んだり、平手でたたいたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音」(p. 7; 下線筆者)と説明し、擬声語も含めている。擬音語や擬態語の理解の仕方には「不備な点」(p. 11)の存在を正直に認めている。擬声語を広い意味で解釈し、擬態語「を含めた呼び名」(p. 12)という言葉も見られる。実は、大坪(1988)は、擬音語と擬態語を合わせて「擬声語」(p. 15)と呼んでいる。

天沼(1974)の4年後の1978年に発行された浅野(編)『擬音語・擬態語辞典』の前書きには、擬声語という言葉は一度も用いられていない。しかし、金田一春彦氏の「解説」には、「外界の音を写した言葉」(p. 5)を擬音語と分類し、「蛙の声の擬音語『ころころ』」(下線筆者、p. 5)は、「擬声語ということが出来る」(p. 6)と指摘している。そして、「音によって象徴的に表す言葉」(p. 7)が「擬態語」で、無生物の状態を表すものが、正統の「擬態語」、生物の状態を表すものは「擬容語」、人間の心の状態を表すものは「擬情語」と呼ぶことができることを指摘している。この金田一春彦氏の「解説」の指摘の内容が広まらず、「擬音語・擬態語」という題名のほうが、一般的に広く用いられたと考えられる。

日本で一番売れている国語辞典と言われる『新明解国語辞典』(第7版、2012年)においては、「擬音語」の項目で、「音や声

をまねて表わした言葉。例、がたがた・わんわん。擬声語」(p. 330)と記述している。これは、オノマトペの専門辞書の記述を反映した記述になっているためであろう。「擬声」の項目では、「他人の声や動物の鳴き声などをまねて発音すること」と説明し、続けて、「広義では、物の音をまねて発することをも指す」(p. 342)と述べている。擬音語は、擬声語の意も含んでいるが、逆の場合も存在することを指摘している<sup>3)</sup>。これは、辞典使用者の混乱が予想される説明である。

さらに、『広辞苑』(第6版、2008年)の「擬音語」の項目では、「実際の音をまねて言葉とした語」(p. 659)で、表現の実例として「さらさら」「ざあざあ」「わんわん」を挙げている。それに続けて、「擬声語。広義には擬態語も含む」(p. 659)と説明している。擬音語と擬声語の区別は、行われていない。「擬声語」の項目でも、「①擬音語と同じ」「②特に、人・動物の声をまねた語」(p. 680)と説明し、「きゃあきゃあ」「わんわん」の類で、「写声語」と説明している。日本語のオノマトペ研究が世界的なレベルで貢献するためには、用語の定義が整理され、標準化される必要がある。

### 3. 学問上の世界規模化と定義の標準化の必要性

21世紀に入り、経済分野だけではなく、社会のいろいろな分野で国際化・世界化が進められている。この進展は、教育や学問の分野でも、例外ではない。着実に教育や学問の世界も、国際化・世界化が推進されている。そこで、学問上、日本語と英語の用語の定義に見られる「不

一致」(隔たり)は、できるだけ解消される必要がある。国際的な場でコミュニケーションを行う機会が増えつつあり、その際に生じる誤解を、できるだけ少なくすることに繋がるためである。

明記しておきたいことは、グローバル化が進むことは、各言語の独自の文化を消滅させることを必ずしも意味していないということである。グローバル化の進展とともに、少数民族の文化にも焦点が当てられ、その文化を守ることに繋げることも可能になる、という一面があることを忘れてはならない。言語学の分野においても、世界的規模での発言力を増すためには、用語の「標準化」が進められなければならないことを痛感している。

国際化や世界化に対応する必要上、日本語のオノマトペは、擬音語や擬声語だけではなく、同じ形態で擬態語としても多用されること、つまり、多義性という特徴があるために、広義の解釈でオノマトペを考察している点を、明確に指摘する必要があると考えている。

### 4. 日本語のオノマトペの新しい積極的な活用例

21世紀に入ってからの日本語のオノマトペには、めざましい進化が見られる。コミュニケーションの手段としてのオノマトペの使用を肯定的に解釈し、日常生活の意思伝達を円滑にする手段として、積極的に活用する働きかけが見られる。その筆頭が、スポーツオノマトペである。人間の身体のリズムと連動したオノマトペで、ハンマー投げの室伏広治選手が投擲する際に絶叫する「ンガー！」(ンッガアアアアアア)や、卓球

の福原 愛 選手がスマッシュを決めた時に発する「サー！」(サー、サーサー、サーサーサー、サーサーヤーという4パターンが存在)、ブルース・リー (Bruce Lee: 1940-1973) が中国武術の格闘の際に発した「アチャー！」や「アチャー！」(通称は怪鳥音)などを意味している。その効果は、シャウティング (shouting) 効果と呼ばれ、①パワーとスピードの向上や、②リズムやタイミング、③リラックス、④モチベーション (動機づけ)、⑤威嚇や挑発、⑥やる気と気合いを引き出す力、などの効果が指摘されている。その言葉を発声することによって、潜在能力を最大限に発揮させる力があると指摘されている (cf. 藤野 2013b: 5)。

スポーツオノマトペの他にも、ある特定の分野や用途に限定して応用されるオノマトペの例が見られる。これは、五七五音節の短詩型の表現を活用した「世界ハイク」に見られる現象と同じである (cf. 吉村 2008b: 213-248)。例えば、甘いデザートや味の食感をオノマトペで伝える「スイーツオノマトペ」や、子育てに役立つ言葉として用いる「子育てオノマトペ」、着ている服に関連した「アパレルオノマトペ」という表現が創造されている。ある特定の用途に応じて、オノマトペだけで言いたいことを伝えることができるという点に、日本語のオノマトペの豊かさが反映している。

福田 (2005) のスイーツオノマトペの用例を、以下に引用すると、「くんくん (バナナのバイクドチーズケーキ)、くちやくちやく (松の実のキャラメル)、さくさく (歯型のシナモンビスケット)、さくんさくん (チョコレートタルト)、ふわふわ

(ラズベリーのヨーグルトムース)、ふわふわん (クリームだけのスポンジケーキ)、かりかり (りんごのホットパイ)、かりんかりん (砂糖衣のかりん糖、素揚げのかりん糖)、あむあむ (胡麻と甘納豆のお饅頭)、はむはむ (ピーナッツジェリーサンドイッチ)、ぱりぱり (ミューズリーのチュイール)、もぐもぐ (卵ドーナツ)、もちもち (イチジクのパーフルドン)、べろべろ (ミントキャンディ)、くるくる (そば粉のパンケーキロール)」などがある。オノマトペは、すべてひらがなで表記され、二つずつが対を形成している。香りや、食感、形状などの五感の情報に基づいて、オノマトペが選択されている。スパイス入りのはちみつレモンを表す「しゅわしゅわ」という汁物のスイーツも、含まれている。スイーツオノマトペの特徴は、スイーツの特徴をオノマトペだけをを用いて表現し、そのスイーツの名前として使っていることである。オノマトペの表現効果と実物の写真を利用して、それぞれの各スイーツを説明している。

子育てオノマトペの実例としては、表情を明るくする「パッチリ、ニーツ」(2歳～小学生の育児の「困った！」を解消する)、隠れた才能を発揮させる「キラキラ」(3歳～小学生向け)、本好きにする効果が期待される「ジャジャー」(0～3歳児向け)がある (cf. 藤野 2013b: 43-59, 150-152)。オノマトペは、子供や親の脳に刺激を与え、子供にも伝わりやすい言葉と考えられている。友達の発表や意見を聞く時に、おへそから電波を出すイメージで相手に体を向けることを表す「おへそピピピ！」や、床に両足をびったりつけて背筋を伸ばすことを表す「ピ

タッ!ピン!)などの例が考案されている (cf. 藤野 2013b: 193-194)。

アパレルオノマトペの実例としては、2歳から小学生向けとして、コントラストの明確なコーディネートをしている子供には「シャキッとしているね」、やさしい色合いの服を着ている子供には「フワッとしているね」、シンプルでカッコいい服を着ている子供には「シュッとしているね」がある (cf. 藤野 2013b: 65-66)。

オノマトペの表現語句は、短くて記憶に残りやすいために、障碍児の教育やリハビリテーション (rehabilitation) にも活用されている。これらは、日本文化の中で効果が見られる応用例である。

## 5. 日英語のオノマトペの表現の多様な相違

日英語の対照研究の視点からオノマトペを考察すると、日本語のほうが英語よりもオノマトペが豊かであることが、すぐに理解できる。それは、日本語のオノマトペが、英語では直訳することが困難で、意識されているためである。日本語のオノマトペは、「英語の三倍・1200種類にも及ぶ」(山口 2002: 表紙カバー) という指摘も行われている。

例えば、「位置について、用意、ドン!」は、英語では “On your mark. Get set. Go!” “Ready, steady, go!” “Ready, set, go!” と言われる。日本語では出発を知らせる号砲を表す擬音語の「ドン」が用いられるが、英語では「行く」という意の動詞の命令法、goが用いられている。日本語では「ドン」という擬音語を用いているという点には、日本語の状況依存性の高さが反映されている。

日本昔話の「鶴の恩返し」では、「空から一羽の鳥がひらひらと舞うように落ちてきました」は、英語では “a bird fluttered down from the sky” と訳されている (千葉 2010: 4-5)。日本語の副詞の擬態語「ひらひらと」が、英語では動詞の flutteredと、このflutteredの音象徴によって表現されている。そして、「若者の足元まで来ると、ぱたりと倒れたのです」は、“She landed by his feet and fell down.” と翻訳されている。原文の「ぱたりと」の意味を明確に表すために、“She landed by his feet and collapsed.” と表現することができる。「崩れるように倒れる」という意味を持つ動詞の collapsedによって、「ぱたりと」の意を表すことができる。このように日本語のオノマトペは副詞で表現されることが多く、英語では一般的に動詞で表されることが多い。

日本昔話の「桃太郎」では、「ある日のこと、おばあさんがいつものように川で洗濯をしていると、川上から、ドンブラコッコスコッコと、大きな桃が流れてきました」は、“One day, as the old woman was doing the washing, a large peach came bobbing and tumbling down the river.” (千葉 2010: 17) と訳されている。英語訳では “bobbing and tumbling” (上下左右に揺れながら) と表現されている。心地よいリズムのある「ドンブラコッコスコッコ」は、擬音語とも擬態語とも考えることができる。原文の日本語のほうが、読み手や聞き手に考えさせる表現になっている。英語訳のほうが、明示性が高く、曖昧性が低くなっている。

昔話の「おむすびころり」では、擬態語の「ころり」が題名に用いられているが、

英語訳では、“The Rolling Rice Ball” という表現で動詞の現在分詞形が用いられている。そして、“Rice Ball”のRiceと頭韻を踏ませて、Rollingが用いられている。題名にも擬態語を用いている点に、日本語らしさ、日本語の状況依存性の高さが反映されている。つまり、この題名は読み手や聞き手に考えさせる効果があり、余韻を与えていると言える。

対訳版の『ドラえもん』(2002)では、水をかける時の擬音語の「ドボ」(p. 41)が、英語訳ではSPLASHと訳されており、水の量が少なくなった表現の「ジャア」(p. 42)もSPLASHで、大量の水をかけた時の擬音語の「ザバ」(p. 61)もSPLASH、プールに飛び込んだ擬音語の「ドブン」(p. 62)も英語ではSPLASHと訳されている。日本語のオノマトペのほうが英語よりも、豊かであり、オノマトペに関しては繊細で微妙な描写力を備えていることは、確かである。しかし、英語では大文字と小文字の区別が行われており、英語のオノマトペは、ほとんどすべて強調形としての大文字で表記されている。

対訳版『サザエさん』(2003)では、原文の「かじだーッ。カンカンカンカン、カンカンカンカン」(p. 134)が、英語訳では“FIRE! FIRE! CLANG CLANG CLANG CLANG”と表現されている。原文の日本語では「かじだーッ」と促音の「ッ」がカタカナで表記されているが、火事情報を伝える語が一度だけしか使われていない。そして、擬音語の「カン」が4回反復されて「カンカンカンカン」と表現され、それがもう一度、反復されている。英語訳では、重要な火事情報のFIRE!が反復されており、CLANGが4回、反復さ

れている。原文ではオノマトペに焦点が置かれているのに対して、翻訳の英語では、火事情報に焦点が置かれている。

対訳版『サザエさん』(2003: 39)では、「キケンキケン」はDANGER!と、「ワイワイワイ」はWAAH!と訳されている。原文の日本語のほうが、語句の反復が多く見られる。オノマトペの表現は短いものが多いが、そのオノマトペにも各言語の特徴が色濃く反映されている。

## 6. 日英語のオノマトペの共通性と音象徴

近代言語学の父と呼ばれるスイスの言語学者のソシュール (Ferdinand de Saussure: 1857-1913) は、言語の意味と音の関係が無関係であること、つまり、言語の恣意性という特性を指摘している。しかし、オノマトペは言語の恣意性の例外に相当する<sup>4)</sup>。オノマトペの音と意味の間には密接な関係があり、「音象徴」の存在が指摘されている。

例えば、サ行、特に「さ」と「す」で始まるオノマトペ、つまり、/s/ 音は、「なめらかさ、スムーズさ」を表している (cf. 田守 2002: 151)。例えば、「さくさく」や「さくっと」「さっくり」「さっさと」「さっと」「さらさら」「さらっと」「さらり」「さやさや」「すいすい」「すかっと」「すっきり」「すくっと」「すっくり」「すっと」「すべすべ」「するする」「するり」「するりと」のような擬音語や擬態語が存在する。英語においても、sashay (滑るように進む、斜めに進む) や、slide (<人などが氷の上などを>なめらかに滑る)、skip (<人や子羊などが>軽く跳ぶ)、slash (<刀やナイフなどで>さっと切る)、slick (滑らかな、

すべすべした)、sling (<石など>を投石器で射る)、slip (<人や物がツルっと>滑る)、spin (<軸を中心に急速にコマなど>を回転させる)、stick (<人が鋭い物を物などに>突き刺す)のような動詞や形容詞が存在する(cf. 田守 2002: 151-155)。

田守(2002: 155-158)は、水しぶきの音についても言及している。擬音語の「ばしゃ」「ばしゃり」「ぼちゃっ」「ぼちゃん」「ぼちゃん」「じゃぼーん」「じゃぼーん」などがあり、英語にも splash (<人・物が水・泥などをピシャッと>はねかける)、spray (<人・物>にしぶきをかける)、spatter (<人・物が水・泥など>をはねかける)などの動詞が見られることから、水しぶきを表す語は、日英語で「共通して両唇閉鎖音と粗擦音を含んでいることが多い」(p. 158)と指摘している。

オノマトペの構造的性に関しては、三戸・寛(1981: iii)が、無声摩擦音の「はらはら」「ひらひら」は「中立的」であるが、有声破裂音の「ばらばら」「びらびら」は「湿気・重さ」を、無声破裂音の「ばらばら」「ぴらぴら」は「乾燥・軽さ」を感じさせると述べている。

旗や帆が風に吹かれて生じる擬音語の「ぱたぱた」は、英語では flap (<旗などが>パタパタ揺れる)や flutter (<旗などが>ひらひら翻る)、廊下を走った時に生じる足音の擬音語の「ぱたぱた」は、英語では pitter-patter (<パタパタと>音をたてる<雨音や足音>)、木の葉の音を表す「カサカサ」は rustle (カサカサ音をたてて動く)、焼肉料理をした時の「ジュージュー」は、sizzle (をジュージューと焼く)で表現する。このように音象徴については、日本語と英語で共通しているこ

とが多い。そこで、田守(2002: 155)は、音象徴の普遍性の可能性を示唆している。日本語はオノマトペが豊富であるという事実から、日本語は音象徴(sound symbolism)にも富む言語であると言える要素を内包している。

## 7. オノマトペの表現効果と文化的特性—感性の表現の魅力

うがいの方法として、「ブクブク」洗いと「ガラガラ」うがいを、2～3回繰り返すのがよいという掲示が、大学構内に貼られていた。この「ブクブク」は、擬音語で、口に半分ほどの水を含み、唇を閉じて頬の筋肉を動かし、「ブクブク」と口の中の隅々まで水を動かすことを意味している。「ブクブク」洗いというオノマトペを含む表現の効果は、簡潔性や、誘目性、多義性、曖昧性、さらに、読み手に意味を考えさせる効果にある。「ガラガラ」うがいは、顔を上に向けて口を開けながら、「あ〜」や「か〜」「お〜」と声を出し、喉を震わせて洗うことを意味している。「ガラガラ」うがいという表現も、論理や理性には訴えていないので、堅苦しさが避けられている。親近性がある。

21世紀は、触感や、色、匂いなどの感覚的刺激を駆使して、消費者の身体的感覚や感情に訴える「感性産業」の時代とも言われている(cf. 山下 2002: 9)。感性産業というのは、米国のシアトル系コーヒー店のように、物ではなく、経験や体験を消費者に提供している産業であるが、ファッションやインテリア、自動車などの分野でも、多彩な色彩や斬新なデザインが重視されている。オノマトペは感覚的で感性に訴える表現である。嗅



覚や触覚は、脳の中で記憶や情動とも密接に連携している。五感を通して身体的に体得された記憶は、言葉による記憶よりも持続期間が長い。この点にも、感性の表現の魅力が存在する。

Chang (1990) は、「世界の主要言語の中で日本語の擬態語・擬音語ほど豊富で重宝な言語表現」(p. iii) はないことや、日本語の擬音語・擬態語は象徴的形式の表現であり、瞬間的にある情景を感覚的・情緒的に描写していること、「直感的連想力をもってさまざまな意味を浮かび上がらせる作用があり、一種の言語美を生む力」(p. iii) があること、「単に音声表象として使われるオノマトペとは類を異にしたもの」(p. iii) であることを述べている。

オノマトペには、日本人の自然現象に対する感覚的繊細さが反映している。そして、オノマトペは、一つの感覚だけではなく、聴覚と視覚や、視覚と触覚や味覚のような複数の感覚に関与することによって、微妙な意味を伝えることが可能になっている。つまり、日本語のオノマトペには、読み手や聞き手の脳内に蓄積されている多様な経験の記憶を、直接的に呼び覚ます能力が備わっている。さらに、心地よいリズム、つまり、スピード感や、言葉遊びの要素が含まれている。

日本語におけるオノマトペの豊かさや多用は、日本語が主観的・省略型言語であることを反映しており、英語のオノマトペの表現は、英語が客観的・分析型言語であることを反映している。

## 8. おわりに—日本語の感性の洗練さを世界に伝える

日本語のオノマトペの豊かさは、日本

語の特色になっているが、日本語の「名脇役」であり、決して「主役」ではない。スポーツオノマトペにおいても、身体のリズムと連動したオノマトペが主役ではなく、そのオノマトペを発声すること自体が、大切な行為で「主役」になっている。子育てオノマトペも同様で、子育てに役立つ「魔法の言葉」としてのオノマトペは「名脇役」であり、愛情を持っている親が子供に対して言葉をかけるという行為自体、つまり、発話が「主役」である。

英語では、bow-wow という純粋な犬の鳴き声を表す擬声語よりも、動詞化した「(ワンワン) 吠える」の意の bark に重点が置かれている。英語は「吠える」という「行為」に重点を置いており、日本語のオノマトペは、どのように吠えるかという「状況」に重点を置いている。この点が、英語と日本語のオノマトペの表現上の根本的な相違になっている。

つまり、英語には行為者(人間)中心の文化という特性が見られ、吠えるという行為を行う犬に重点(焦点)が置かれている。それに対して、日本語は「ワンワン」「キャンキャン」「ウー」「ガオー」「クンクン」「キャーン」などの豊かなオノマトペを持っている。これは、日本語が状況中心表現を大切にする文化を持っていることを表している<sup>5)</sup>。

言い換えると、英語は、特に論理や理性を重視した cognitive communication (知的コミュニケーション) を大切にしており、日本語は、察しの文化や affective communication (情的コミュニケーション) を大切にしており、それぞれの言語特性を反映している。

日本語のオノマトペの特徴は、擬態語

の多さだけではない。オノマトペの使用頻度の高さ和使用範囲の広さにある。これらは、日本の自然観や文化的特徴、つまり、状況中心表現を好むという特性や感性の細やかさを反映している。

確かに、オノマトペは日本語の持つ魅力の重要な要素であるが、敬語や数詞とともに、日本語を学修する外国の人々が苦勞する表現でもある。幸いにも、グローバル化の波と日本のマンガやアニメの人気に乗って、一期一会の「おもてなし」の精神や、バランスのとれた和食の健康志向性が、世界市民に関心が持たれつつある。対訳版の『ドラえもん』(2002)でも、子供の泣き声の「ワア～」はWAAH(p. 75)、風が強く吹く音の「ゴオオオ」はGROOH(p. 91)で、「ビュウ～」はHWOOO(p. 91)、叫び声の「キャー」はKYAH!(p. 115)と、日本語に近い表記で訳されている<sup>6)</sup>。そこで、今こそ、日本語のオノマトペの持つ表現力や感性の洗練さが、世界市民に関心が持たれるように、日本の大切な文化として英語で発信していくことが、将来、日本語の魅力が増加する上で大いに役立つであろう。

### 註

1. オノマトペの使用も、TPO (Time, Place, Occasion) が大切で、論文での使用は避けられ、その使用には賛否両論がある。使用を避けた作家には、三島由紀夫や森鷗外がおり、最大限に活用した作家には北原白秋や、草野心平、高村光太郎、谷川俊太郎、萩原朔太郎、宮澤賢治などがいる。村上春樹もオノマトペを好む作家の一人である。例えば、短編『YVピープル』の「テレビの

画面がさっと白くなり、ちりちりという音が聞こえた」を、Alfred Birnbaumは“The screen glows and I hear it tinkling.”と訳している。このtinkleは、チリンチリンと鳴る鈴などの音を表す語で、英語訳の困難さが表れている。

2. オノマトペという言葉の語源は、フランス語の *onomatopée* (the making of words「名前や語を造ること」の意)。元々は古代ギリシャ語から古典ラテン語を経て、フランス語に入った語。英語では *onomatopoeia* (初出例1553年) であるが、*onomatope* (初出例1828年) という語も用いられている。
3. 『新明解国語辞典』(第7版、2012年)の「擬態語」の項目では、「身ぶり・状態の感じを表わして作った言葉。例、にっこり・ゆらゆら」(p. 344) と説明している。
4. さらに、本来の日本語である和語には、ラ行音や、濁音・半濁音、拗音で始まる語彙が見られないと指摘されているが、オノマトペには見られる (cf. 沖森 *et al* 2011: 60)。
5. 多くのオノマトペは状況を描写している。例えば、淡泊さを表す擬態語「さっぱり」は、気分を表す「爽やか」から、「あっさり」は、「浅い」から来ており、「り」という様子を表わす語尾が付いて音が詰まったものである。濃厚な状態を表す「こったり」は、「濃い」から来ている。そして、色や、味、気性などの状態を表している。「あっさり」は濃くなる前段階の理由(原因)を、「さっぱり」は印象としての結果を表しており、両方とも、状態を表している。

昔話「かちかち山」の「(たぬきは豆

を) むしゃむしゃ食べてしまいました」は、英語訳では“gobbled them all down”(川内 2000: 10-11)と、「たぬきは、もう、ふらふらになって、山をくだりました」は“the badger staggered crazily down the mountain”(川内 2000: 38-39)と表現されている。

6. 英語訳*Dragon Ball*では、飛んでいる時の状態を表す「ギユン」がHYUUN(p. 12)、「ひゅーん」がHYUUNNN(p. 23)、「ヒュー・・ン」がHYUUUNNN…(p. 22)、「ギューーツ」がGWOOOMMMM(p. 24)、「ギューン」がGKUUNN(p. 30)、「ギャン」がZHMMM(p. 62)、「シュン」がSHMM(p. 64)、「バキキッ」がKRKRAK(p. 84)と訳されている。

#### 主要参考文献(あいうえお順)

- 浅野鶴子(編)・金田一春彦(解説)(1978)『擬音語・擬態語辞典』(角川小辞典12)東京:角川書店。  
天沼寧(編)(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京:東京堂出版。  
大坪併治(1988)『擬音語の研究』東京:明治書院。  
沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子(2011)『図解日本の語彙』東京:三省堂。  
尾野秀一(編)(1984)『日英擬音・擬態語活用辞典』(*A Practical Guide to Japanese-English Onomatopoeia & Mimesis*)東京:北西堂書店。  
小野正弘(編)(2007)『日本語オノマトペ辞典—擬音語・擬態語4500』東京:小学館。  
小野正弘(編)(2009)『オノマトペがあるから日本語は楽しい—擬音語・擬態

語の豊かな世界』(平凡社新書474)東京:平凡社。

- 笈 壽雄・田守育啓(編)(1993)『オノマトピア—擬音・擬態語の楽園』東京:勁草書房。  
川内彩友美(編)・McCarthy, Ralph F.(訳)(2000)『まんが日本昔ばなし:かちかち山(*Once upon a Time in Japan: Click-Clack Mountain*)』(Classic Bilingual Picture Books: 8)東京:講談社インターナショナル。  
角岡賢一(2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』東京:くろしお出版。  
こどもくらぶ(編)(2008)『いろいろな国のオノマトペ』(世界のことばあそび⑤)東京:旺文社。  
桜井 順(2010)『オノマトピア—擬音語 大国にっぽん考』東京:岩波書店。  
田守育啓(2002)『オノマトペ—擬音・擬態語をたのしむ』東京:岩波書店。  
丹野眞智俊(2005)『オノマトペ(擬音語・擬態語)を考える—日本語音韻の心理学的研究』京都:あいり出版。  
千葉幹夫(編)・大高ゆきお(コラム執筆)・井口紀子(英文作成)・Walt Wyman(英文校正)(2010)『CD付き:英語で楽しむ!日本昔ばなし』東京:ナツメ社。  
得猪外明(2007)『へんな言葉の通になる—豊かな日本語、オノマトペの世界』(祥伝社新書83)東京:祥伝社。  
鳥山 明(Story and Art)・Gerard Jones(English Adaption)・Lillian Olsen(Translation)(1984) *Dragon Ball Z*, vol. 1-2, Shonen Jump Graphic Novel, San Francisco: 講談社イン

- ターナショナル。
- 長谷川町子(2005) *The Wonderful World of Sazae-san*, 『(文庫版) 対訳: サザエさん』(vol. 1) 東京: 講談社インターナショナル。
- 浜野祥子(2014)『日本語のオノマトペ—音象徴と構造』東京: くろしお出版。
- 稗島一郎(1993)『広告の言葉—日英語の比較と対照』東京: 学文社。
- 福田里香(料理と文)・長崎訓子(絵)(2005)『スイーツ オノマトペ』東京: 筑摩書房。
- 藤子・F・不二雄(2002) *Doraemon: Gadget Cat from the Future*, Shogakukan English Comics 1-10 (その第1巻)、東京: 小学館。
- 藤野良孝(2008)『スポーツオノマトペ—なぜ一流選手(トップアスリート)は「声」を出すのか』東京: 小学館。
- 藤野良孝(2011)『「一流」が使う魔法の言葉—スポーツオノマトペで毎日がワクワク』東京: 祥伝社。
- 藤野良孝(2013a)『脳と体の動きが一変する秘密の「かけ声」』(青春新書) 東京: 青春出版社。
- 藤野良孝(2013b)『子どもがグングン伸びる魔法の言葉』(祥伝社黄金文庫603) 東京: 祥伝社。
- 三戸雄一・笈寿雄(編集主幹)(1981)『日英対照: 擬声語(オノマトペ)辞典』東京: 学書房。
- 山口仲美(編)(1989)『ちんちん千鳥のなく声は—日本人が聴いた鳥の声』東京: 大修館書店。
- 山口仲美(2002)『犬は「びよ」と鳴いていた—日本語は擬音語・擬態語が面白い』(光文社新書56) 東京: 光文社。
- 山口仲美(編)(2003)『暮らしのことば: 擬音語・擬態語辞典』東京: 講談社。
- 山口仲美・佐藤有紀(2006)『「擬音語・擬態語」使い分け帳』東京: 山海堂。
- 山下柚実(2002)『五感生活術—眠った「私」を呼び覚ます』(文春新書240) 東京: 文藝春秋。
- 吉村耕治(2008a)「現代のオノマトペに見られる日英語の相違—副詞使用型と動詞・形容詞使用型の文化的相違」日英言語文化学会(編)『日英の言語・文化・教育—多様な視座を求めて』東京: 三修社, pp. 170-180。
- 吉村耕治(2008b)「英語 Haiku と俳句に見られる文化的相違—英語 Haiku による東西文化交流の可能性」吉村耕治(編)『現在の東西文化交流の行方—国際化と世界化の光と影』大阪: 大阪教育図書, pp. 213-248。
- 読売新聞英字新聞部(監修)・水野良太郎(編)(2014)『オノマトペパラ—マンガで日本語の擬音語・擬態語』(Onomato-Pera-Pera: An Illustrated Guide to Japanese Onomatopoeia) 東京: 東京堂出版。
- Chang, Andrew C. (1990) *A Thesaurus of Japanese Mimesis and Onomatopoeia: Usage by Categories* (『<和英>擬態語・擬音語分類用法辞典』) 東京: 大修館書店。
- Jespersen, Otto (1922) *Language: Its Nature, Development, and Origin*, London: George Allen & Unwin Ltd. [三宅 鴻(訳)(1981)『言語—その本質・発達・起源』(上下、全2冊) 東京: 岩波書店。]

(関西外国語大学)